



須賀洋一先生の思い出

著者	河村 克俊
雑誌名	外国語外国文化研究
巻	19
ページ	167-168
発行年	2023-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030954

須賀洋一先生の思い出

河村克俊

初めてお目にかかったのは、1997年4月、新任教員を紹介するために設けられた法学部の昼食会だった。この会が終わった後、先生を研究室にお邪魔した。その折、学内の語学教育が各学部配属されている語学教員に委ねられていることや、当時開設されて間もない総合政策学部学部では第二外国語が選択必修でないことなど、学内のことをいろいろ教えていただいた。それ以来、ご退職になる2003年3月まで、同じ言語の教育を担当する後輩として、何かと甘えさせていただいた。

1999年6月、言語教育研究センター主催の第一回「ドイツ週間」を催した際、須賀先生は「森鷗外とドイツ」というテーマでご講演くださった。先生のご専門はシラーやヘッベルなど、十八、十九世紀ドイツの劇作家や、二十世紀の作家ハインリッヒ・マンなどであるが、西洋を模範とする近代化をはじめたばかりの日本からドイツに留学し、その言語を習得するとともに文学にも造詣の深いこの作家を、敬愛されていたようである。同じく「ドイツ週間」で、森鷗外の伝記映画を企画され、上映の折には、主人公を演じる某有名俳優の流ちょうなドイツ語を、褒めておられた。

須賀先生とは、テニスコートでもお会いすることがあった。そこでは、還暦を既に幾つも過ぎておられたにもかかわらず、迅速な動きでボールを打ち返される先生の身体力に脱帽することが何度もあった。何人かの方々を交えてゲームも行ったが、自分より年下の教員や職員を相手にボールを追いかけて、汗を流すことを楽しんでいるようだった。テニスの後、食事をご一緒する機会が何度もあった。行き先は甲東園駅近くの、今はなくなってしまったお好み焼きのお店である。運動の後なので、かなり疲れておられたはずなの

に、店主や他の客と雑談しながら先生はいつもたくさん飲まれた。一度、先生のペースに合わせて飲んだことがあったが、その日は帰宅後、身体が嫌な反応を起こすことになってしまった。お酒のほうも、須賀先生にはまったく歯が立たなかったということである。

ご研究の対象であるフリードリッヒ・ヘッベルについて書かれた論稿を読ませていただいたことがある。十九世紀最後のドイツの悲劇作家といわれるヘッベルは、貧しい左官の子として生まれ、ギムナージウムから大学へ進むというエリートコースを歩むのではなく、独学で文学修行を行い、地方新聞への投稿を続け、それが識者の目にとまることで文学者としての道を切り開いたという経歴をもつ。教会区役員の書記という地味な職業からスタートし、その後時を経てようやく社会で認められることになるこの作家に、須賀先生は特別の愛着をもたれていたようである。ここで思い出されるのが、「努力するものは報われる」という言葉である。この言葉を須賀先生はたいへん好まれていた。委員会や研究会の後、居酒屋にご一緒した折、この言葉を先生から何度もお聞きすることがあった。親しい学生に向けても、この言葉を語られていたようである。この言葉は、教会区役員の書記として働きつつ独学で文学を学び、徐々にその才能が認められることになり、文学の世界で成功を勝ち取ることになったヘッベルを、長年にわたり研究対象とされた須賀先生のお人柄を思い出させてくれる言葉であるように思われる。

ご冥福をお祈り申し上げます。